

現代中国の書家二十人を紹介する連載

中国当代書家二十人

第14回

中国書法家協会主席

監修／蘇士澍

取材・文／郭同慶

102

李剛田

李剛田

り・ごころ

一九四六年、河南省洛陽市に生まれる。中国書法家協会理事、同機関誌《中国書法》編集長、同篆刻芸術委員会副委員長、河南省書法家協会名誉主席、鄭州市文聯主席などを歴任し、現在、西泠印社副社長、中国国家画院委員、同画院書法研究院研究員、同画院篆刻研究院研究員。《隸書教程》《篆書教程》《篆刻教程》のほか、《李剛田書法作品集》《当代篆刻名家精品集・李剛田卷》などの作品集、また随筆集《辺縁断想》、印論集《書印文叢》など、著書多数

西泠印社副社長を務め、中国を代表する篆刻家、書法家として知られる李剛田氏。中国中央電視台のテレビ講座を長年にわたって担当し、教育熱心な大家でもある。近年、東京にて個展や西泠印社の展覧会が開催され、日本の書家や印人とも交流を深めている。北京にある李剛田氏の書齋を訪ね、郭同慶氏が取材した。（編集部）

渡遠荆門外 漣波接天流
三峽亂石走 蒼海橫天流
月下飛天鏡 雲生結海樓
仍憐故鄉水 万里送行舟

渡遠荆門外 來從楚國遊 山隨平野盡 江入大荒流 月下飛天鏡 雲生結海樓 仍憐故鄉水 万里送行舟

138×68
2012年

中原出身の巨匠 李剛田

書壇に轟く名声

西泠印社社長を務める李剛田氏は、四年前、東京・飯田橋にある日中友好会館美術館と虎ノ門にある中国文化センターで同時開催した「李剛田書法篆刻作品展」

「西泠印社社員書法篆刻展」および「西泠印社歴代社長書法篆刻展」の三つの展覧会で、相当数の日本人書家や印人と触れ合い、交流を深めた。氏の篆刻作品の中の巨大な印作の原印も同時に展示され、爽快な印刀さばき、石の特性を活かした「金石氣」が溢れた傑作は大いに来場者を魅了した。そして篆隸はもちろん、行書も美しく品格があり、日本人にもなじみ深い古典の要素を満たした作品ばかりであった。そのときの祝賀会で筆者は司会兼通訳を務めたが、この連載の監修者である中国書法家協会・蘇士澍主席の推薦を受けて、取材として北京にある氏の書齋を訪ね、再会を果たすことになった。

李剛田氏は中国を代表する著名な篆刻家、書法家、ならびに書法教育家である。特に學術に強く、その名声は書壇に轟いている。研究論文や著書も多数発行。現在は西泠印社副社長、中国国家画院委員、同画院書法研究院研究員、同画院篆刻研究院研究員を務め、過去に中国書法家協会理事、同機関誌《中国書法》編集長、同篆刻芸術委員会副委員長、河南省書法家協会名誉主席、鄭州市文聯主席などを歴任した。

最初の「出品料」

李剛田氏は、一九四六年四月六日に河南省洛陽市に

生まれた。同市は「二里頭遺址」「偃師商城遺址」「東周王城遺址」「漢魏洛陽城遺址」「隋唐洛陽城遺址」の五大古代都市遺跡を持つ文字通りの古都である。市外地に「龍門石窟」など世界文化遺産に指定された名所が多数に存在。

李剛田氏の家系は、文物を蒐集してきた歴史が長い。父親がさらにそれらを増やし、李氏邸宅の二階の各部屋には漢籍や古書画、特に秦漢の銅印や瓦当が数多く収蔵されていた。

幼い李剛田少年は、家で遊べば秦漢の銅印や銅鏡、道で遊べば隋唐の瓦片か瓦当に当たるほど、古代文明に囲まれた環境に育ったのである。父や兄の影響で、小学校四年生頃から書法と刻印に対する興味が芽生え始めたという。

李剛田少年が通った小学校は、省都・鄭州市内にある「西城莊小学校」だった。最初は帰宅の道中、印章屋の外で遠くから、中で作業している彫り職人の様子を見ているだけだった。段々と好奇心が湧いてきて、近くに行ってみるようになった。そのうち剛田少年は家にあつたノコギリの刃で印刀を作った。印材の産地ではないので、河南省あたりでは、印材はなかなか入手できなかつたが、十歳前後の剛田少年は、瓦片や木で文字を彫り出した。そして、小六の時に「事件」が起きた。

ある日、父親が学校に呼ばれた。剛田少年は新しく入れ替えた学童机に自分の名前「李剛田」を彫り込んだ。先生が吃驚仰天した。呼ばれた

父親は謝罪し、賠償金五元を納めた。親の月收入が数十元の時代に五元の賠償金が家にとって大変大きかつた。こんな高額な「出品料」を払わせて、親に悪かつたと後悔した剛田少年は腕白をやめて、黙々と瓦印を彫り続けることになった。

この「事件」を聞いた兄の忠田氏（当時は北京外大の大学生で、後に同大学の名誉教授になった）は、漢印を模刻した自刻印の印影を送ってくれたという。篆刻を学ぶなら「漢印から始めるのだ」と、書簡には兄のアドバイスが添えられていた。また父は、近所にいる知り合いの篆刻家のところに連れて行ってくれた。剛田少年は古印の模刻の仕方を教わった。それから成人になるまでの間に家蔵の秦漢印をまんべんなく模刻し、真似しながら、創作も行った。そして市や省が主催する青少年書法篆刻作品展に出品を果たすほどに成長した。

ゼミ参加で人生飛躍

その才能や素直な性格が評価され、李剛田氏は一九八〇年に河南省都・鄭州市文聯に地方公務員として起用された。市の文化行政の実務を担いながら、書法や篆刻の研鑽は一日も中断しなかつた。

二年後に本格的研修の機会が訪れた。一九八〇年に河南省第二回文聯代表大会で河南省書法協会が設立された。中国書協よりも一年早かつた。本連載（二〇一九年五・六月号）で紹介した張海氏が河南書協の秘書長に選ばれ、さまざまな書法振興プロジェクトを手掛けた中で、一九八二年に全省の篆刻人材を育成するゼミを安陽市で開催したことがあつた。

張海氏は書壇でも有数の篆刻大家・沙曼翁と蘇白の両氏に講師を依頼した。受講生として八千万人の人口を有する河南省全域から試験で三十名が厳選され、李

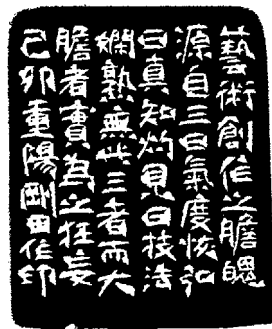
剛田氏も選ばれた。研修期間は泊まり込みで一カ月だった。ゼミで書法史や篆刻史、そして印学などを勉強し、特に明清の皖浙両派の大家名作の摸刻などの特訓も受けた。

沙曼翁は「秦の璽印」と「漢の官印」の文字の併用は認めないという印学的に厳格な立場をとり、伝統の土台の上に立って「印の韻」「金石の氣」を教授した。蘇白は鄧散木の門人で自作の大きな印刀をふるい、現代人の感性である「刀の情、刀の意」を強調した。李剛田氏は両講師の長所を賢く吸収し、誰よりも研修成果を大きく得た。

李剛田氏は書法や篆刻作品のレベルを一気に躍進させて、河南省をはじめ中原地域の新锐作家として、全国に注目されるようになった。そしてある日、雑誌で読んだ印作に衝撃を受けた。その頃、新聞・雑誌は、人民芸術家・斉白石を盛んに宣伝していた。李剛田氏は、印刀の「情」が満ちた斉白石の印風に共鳴し、傾倒した。これまでの秦漢印をベースにした印風に、斉白石を取り入れた。そのことによって李剛田色がいつそう強まり、中国書壇で高く評価された。



《可貴者膽》



1999年



《日利千萬》



1998年

巨匠は中原出身

一九八三年、李剛田氏の篆刻作品は雑誌《書法》で全国篆刻優秀作品に選ばれ、書法では隸書で「第一回全国中青年書法篆刻作品展」に堂々と入選。一九八四年には「第一回中原書法大賽」が河南省鄭州で行われ、河南省体育館に集まった一千名の若手書家が競書を臨み、李剛田氏は会場で任意と命題の二点の作品を書き上げ、全国から招聘された審査員に高く評価されて、わずか十名の一等賞をトップで受賞した。一九八五年には河南省博物館で「国際書法展」が開催され、二十ほどの国や地域の書法家団体が出品し、開幕当日は博物館の扉が押し倒されたほどの観客が詰めかけた。李剛田氏は篆刻と書道の二部門に入選。氏の作品の前には人が集まり、この頃から李剛田氏の作風は人気が出始めた。同年には河南省書協の代表として第二回中国書法家協会代表大会に出席し、三十九歳で理事に選出された。

李剛田氏は観客の眼を奪う奇抜的な印風は求めずに、また故意に独自の個性を追求せずに、穏やかな作風を

重んじ、「一以之貫」の儒教の教えを肝に銘じ、儒教的な審美観を五十年間も貫いてきた。その代表的な傑作は、西泠印社出版社が発行した作品集にまとめられた。

二〇一〇年に西泠印社の会議で杭州に行った李剛田氏は、「呉山花鳥市場」という地元産地直送の印材店が集約している市場に寄った。五〇代の店主が田舎の青田県から運んだばかりの一山の青田石の大型印材を薦めた。

青田石といえば、日本で知らない人がいないほどに良く使われている名石だ。浙江省の南東の瓊江が流れる麗水市青田県で採れ、採石の歴史は最も長い。福建省産の寿山石と肩を並べる屈指の名石だが、店主に薦められた印面が十センチ角の良質で大型の印材は、李剛田氏にとっては初めてだった。この一山の中から李剛田氏は五十点を選び、北京の自宅へ郵送した。

李剛田氏は、興奮気味に一カ月ほどの時間をかけて四十五顆の巨印を一気に仕上げた。そしてさらに三日間をかけて、全作品の印影や拓款を五セットも制作した。それらの傑作は、二〇一〇年に西泠印社出



138×17×2 2011年

春風花木香幽居只恐歸園畫 清夜樽疊倒妙理還須向濁醪

版社が発行した作品集《西泠印社中人——李剛田》に

掲載された。爽快な印刀づかいによる雄渾豪放な印風の内に、李剛田氏は光風静月のような独自の清らかな静さを織り込んだ。この作品群は、中国の印壇で最も影響力のある韓天衡氏や石開氏らの大家と肩を並べる里程標的な傑作だった。日本にも縁があり、二〇一六年に日中友好会館で開催された個展では、それら原印も展示された。金石の気が溢れ、迫力が満ちた傑作は、話題の中心になった。

李剛田氏は確立した印風と同様に、書風や文風においても素晴らしい境地に到達し、書壇で高く評価される作家となった。李剛田氏は、その作品の実力によって、全国書法篆刻作品展では中書協より「中国書法芸術栄誉賞」「第五回蘭亭賞芸術賞」をはじめとする各種の受賞を受賞し、また地元・河南省より「文化芸術優秀成果賞」「德芸双馨芸術家称号」なども受賞。

宋人の詩に「中原自古多豪傑」という句があり、河南省は歴代の文人墨客を輩出した中華文明の中心の一つである。今日の李剛田氏は名実ともに、中原出身で

最も中国で影響力のある巨匠である。

書法教育を愛着

李剛田氏は、先達の「印外求印」（印の学問は印の外で求めよう）の教えを常に肝に銘じ、人より何倍もの時間を学問に注ぎ込んだ結果、今日の書壇で随一の学者であり、教育者となった。中央テレビや数校の大学が李剛田氏を引っ張り合う状況になった。

李剛田氏は八〇年代より、中央テレビの放送大学や教育チャンネルの教養講座で書法や篆刻を教授してきた。中書協名誉主席・張海氏が院長を務める国立鄭州大学の書法学院の教授、そして新鋭作家の育成を趣旨とする当代書法篆刻院の院長も兼務し、名実ともに書法教育に熱心な大家である。

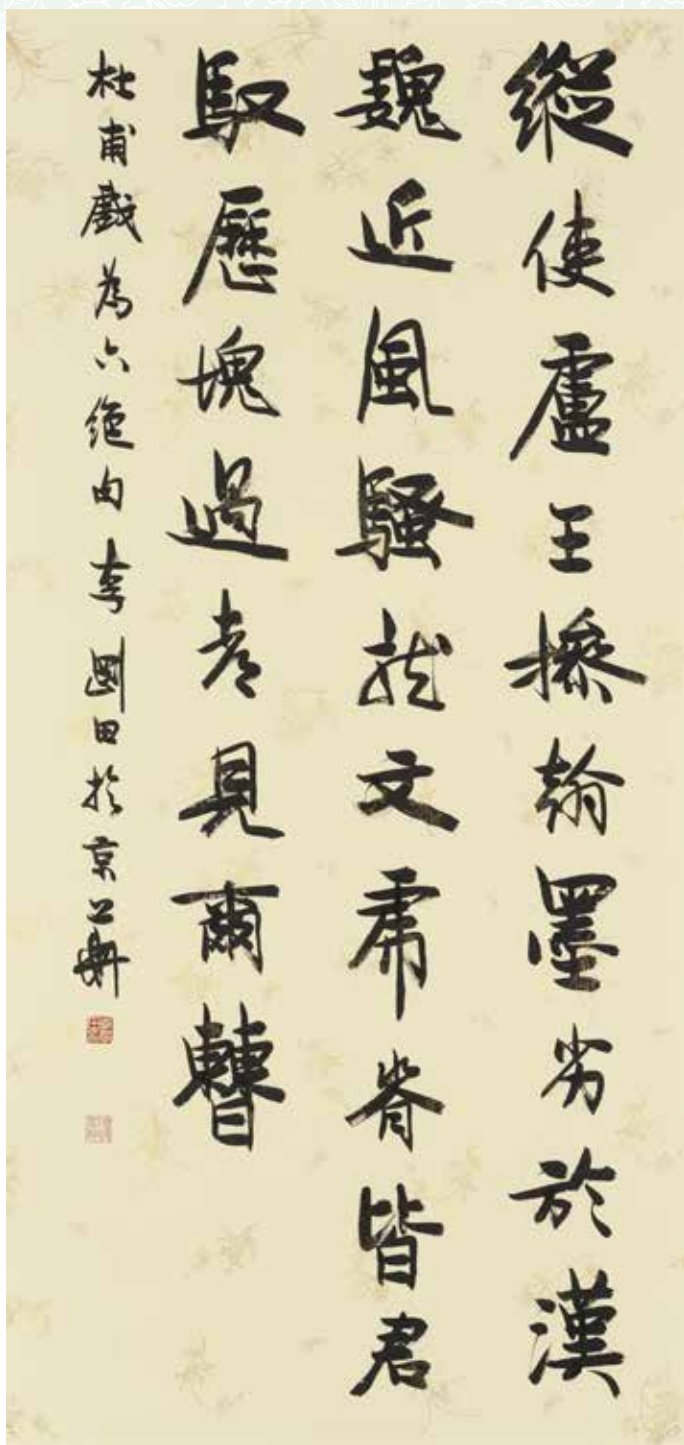
普段は言葉の数が少ない李剛田氏だが、講壇に上がると滔々と捲し立てるほどまでに、専門的な講話には夢中になる。時間を忘れるほど、教育に熱心なのだ。NHKと同じように中国中央電視台（テレビ）にも教養講座がありし、李剛田氏は長年にわたり、その書道

や篆刻の講座を担当した。全国的な放送番組で、プロから愛好者まで大勢の、不確定多数の方々が見る。専門的な知識や奥深い学問をわかりやすく解説する李剛田氏の教授法は、とても評判だ。

李剛田氏は原稿を使わないで講座を進める。たとえば、鄧石如や趙之謙についても即興で講演をしたそうだ。最初、毎回四十分の番組で、篆書講座は三十六回をこなし、非常に視聴率がよかったため、さらに三十四回の篆刻講座が追加された。単に古典を論じるのではなく、近年の書法篆刻の復興ブームの隆盛、そしてその繁栄、またその影について、とてもよく理解している李剛田氏は、時に現実の問題と結び付けながら講義をし、視聴者に人気が高かった。

二〇一七年、張海書法發展基金が全国の新鋭書家を育成する「登竜門」的なプロジェクトとして、当代書法篆刻院を北京に新設した。その院長に李剛田氏が招聘された。

院長となった李剛田氏は、《中国書法》（雑誌社）と《中国書法報》（新聞社）など連携し、年に数回ほどの若手



138×65 2015年

縦使盧王操翰墨 劣於漢魏近風騷 龍文虎脊皆君馭 歷塊過都見爾曹

《杜甫詩直幅》

登竜門の選拔展を開催。応募条件は四十五歳以下、そして必ず中書協が主催した全国展の入選歴を持つ者である。応募作品は、「書法の部」は六尺全紙作品が十枚、「篆刻の部」は印屏四屏と原印十顆。毎回、全国の大勢の応募者から五名を厳選。

そして、李剛田氏が各地にいる入選者を北京に一週間ほど招待し、同書法篆刻院美術館で入選者の五人展を開催、批評会も併設し、審査員たちが一人一人の一点ずつ作品を分析し、率直なアドバイスをを行う。五人の入選者の作品と審査員のメッセージは、翌月の《中国書法》と《中国書法報》の全面で紹介される。その効果は計り知れないほどだ、入選者はすぐに全国書壇で広く知られる人物になり、今日まではずでに七回の選拔展を行い、三十五名の若手書家がこの登竜門に

入選を果たした。新鋭書家の育成にあたり、李剛田氏の功績は大きい。

西泠印社副社長を務め

李剛田氏は一九九八年に開催された「西泠印社第十回社員全体大会」で理事に選出され、二〇〇三年の「第十一回社員全体大会」で理事が再選、そして二〇〇八年の「第十一回社員全体大会」開催の際に西泠印社副社長に栄転した。

南方の杭州が本拠地の同社には、名誉社員を含む約六百名の篆刻家や印学専門家などが在籍している。国内では三十の省や自治区、および直轄市（台湾、香港、マカオを含む）をすべてカバーし、外国でも日本をはじめ、韓国、東南アジア諸国などの書道・篆刻の大家

が名誉理事や社員として招聘されている。

しかし、国内では、理事や社員は江南数省（上海市含む）に集中していることは否定できないのが現状である。啓功氏が最晩年に同印社の社長を兼ねることにし、楊子江より北半分の中国の代表にもなった。しかし、二〇〇五年に啓功氏が死去。西泠印社は社長が不在となり、北方代表の重役もいない状況に陥った。

この状況は三年間ほど続いた。二〇〇八年に西泠印社が創設一〇五周年の「社慶」に併せて、さまざまな記念展を開催し、同時に第十二回社員全体大会や理事会の改選も併行した。李剛田氏本人は知らないところで印社の上層部が事前に動いたようだ。十月二十四日午後の理事会の前に、講堂に通ずる廊下で印社の共産党委員会書記が李剛田氏に声をかけた。「おめでとう」。その時に内定されたことを初めて知った。理事会では予定通り、李剛田氏が副社長に選出された。社長の適任者はまともならず、空席だ。重役は杭州人と上海人が多数である。郭仲選、劉江（本誌二五二号）、朱関田、陳振濂は杭州であり、韓天衡（本誌二六〇号）、童衍方は上海である。

楊子江より北半分の中国の印人代表として、李剛田氏が西泠印社の副社長に推戴された。篆刻芸術の造詣や実績はもちろんのこと、李剛田氏は、人間的に皆に受け入れられる優れた人格が強みだった。選挙活動を少しも行わず、その要職が巡り巡って来たのだ。幸運というより、人望や実力が評価された証である。

李剛田氏は、西泠印社副社長に就任

觀日登東嶽 射濤至錢塘
驛日贊東嶽

取價至錢唐
玉名精舍李剛田

觀日登東嶽 射濤至錢塘

180×46×2 2007年

は、もちろん名誉や厚遇が付きものである。しかし、李剛田氏が引き受けた理由は他にあった。利益を追求した結果、機関誌の品格が落ちたという不評の現状を是正したいという中書協の執行部と、考えが一致したのである。

李剛田氏は、着任するとすぐに改革を推進した。非営利雑誌という本来の方針を重視し、行き過ぎた利益追求の社風を改め、散漫だった編集組織を強化した。品格や信用を取り戻すために、毎週、社内編集の定例会を召集した。

掲載作品の基準を明確化し、作品の芸術性のレベルを優先し、作品の品格が機関誌に相応しいかどうか常に警鐘を鳴らしながら、責任を持って運営。上からの「推薦メモ」がある作品でも、大企業の社長の作品でも、編集会議にかけた。多数決で厳粛な審査を堅持したのである。審査結果を「入選」「改善」「不入選」の三つのブロックに分け、出品者には担当編集者が通達する。「改善」は改善がなされれば、掲載の可能性があると連絡し、「不掲載」についても簡単な通知にせず、その理由をきちんと説明するように義務化した。徐々にこの是正が浸透するにつれて、上からの「推薦メモ」は来なくなった。

李剛田氏は、国を代表する書法誌の権威と品格を死守し、《中国書法》の信用を回復させた。その結果、読者の好感度が改善し、発行数も徐々に増えた。その代わり、毎期に内容の濃い特集を組み込んだ。編集担当者がアンケートや電話でヒアリングし、読者のニーズをまとめた企画を立てる。基本的には半年後の特集企画書を編集会議にかけた。一月の定例編集会議では、七月に発行する特集を決める。たとえば、蘇東坡と沙孟海の企画が承認されると、担当編集者には現地調査を含む十分な時間が与えられる。

後、主に学術部門の責任者を兼務し、社員大会で発表される学術論文を可否する審査会を統括した。「地味に窓を閉じて学問をし、大きく印社の門戸開いて運営しよう」と李剛田氏はスローガンを掲げて役員会議で提唱し、皆の賛同を得た。前者は浅薄な名利行為を抑え、書齋に籠もり着実に学問の道を精進するよう、すべての若い社員に注意し喚起した。尊敬する元社長・沙孟海氏の「西泠印社を世界の印学研究のセンターへの遺志を継承し、地道に印学や書学の研究・人材の育成に尽力した。」

李剛田氏は、二〇〇五年に始まった西泠印社印学発表大会「孤山証印」にも最初から深く関わり、担当役員となって数年一度の学術大会に貢献してきた。

さまざまなかたちで李剛田氏は印社に発展に尽力し、二〇一八年一月には西泠印社一一五周年記念「進徳修

機関誌の品格を取り戻す

業・李剛田書法作品寄贈記念展」が同社の主催で開催され、対聯を中心にした三十四点の力作を同印社に寄贈した。

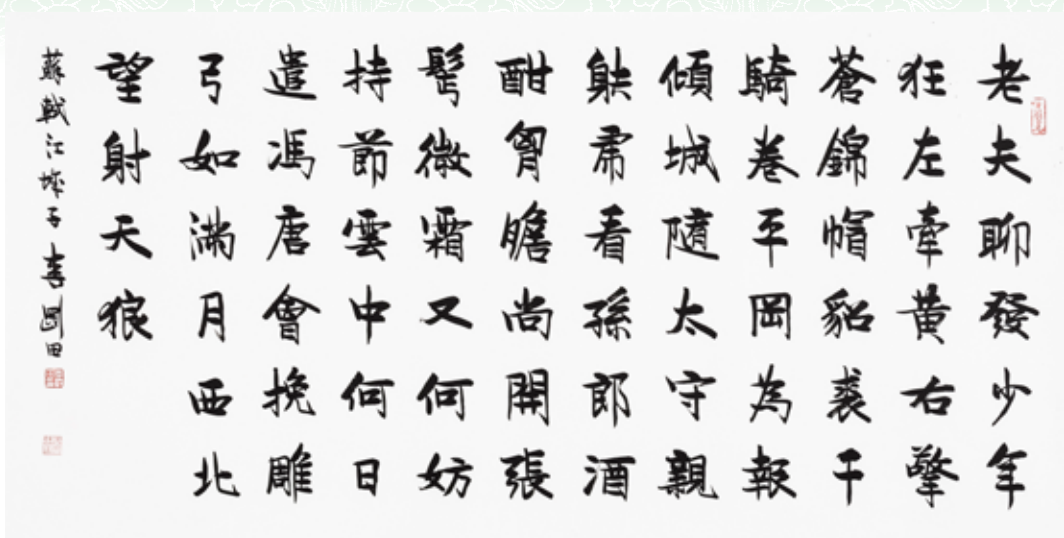
李剛田氏にとって地方の河南省から中央への「進出」は、不本意だった。二〇一〇年、河南省鄭州市文聯主席・李剛田氏に北京から一本の電話がかかった。中書協機関誌である《中国書法》編集長への就任の打診で、電話の相手は中書協秘書長・陳洪武氏だった。

李剛田氏の書法、篆刻、書学、書史、書法教育、書壇現状の把握、および地方文聯での組織管理力など、各方面の実力が総合的に評価されたのである。

中書協の機関誌の最高責任者に就任するにあたって

李剛田氏は五年間にわたり編集長を務め、芸術家の良心をもって六十期の雑誌を発行した。幅広く古今の学術的な知識を提供し、毎月の新刊の発行を楽しみにしている定期講読の読者は全国に五万人ほどいた。

《蘇軾詞横幅》



68×138 2014年

老夫聊發少年狂 左牽黃 右擎蒼 錦帽貂裘 千騎卷平岡 為報傾城隨太守 親射虎 看孫郎……

日本人書家と交流する知日派

一九九〇年代、西泠印社副社長を兼ねていた梅舒適氏は、中国の各省と篆刻交流展を積極的に行った。当時、河南省書法家協会篆刻委员会主任（委員長）であった李剛田氏は、梅氏の打診を受けて、日本篆刻家協会と河南省書法家協会の合同展を成功させた。その際、李剛田氏は梅氏に依頼されて、梅氏の自用印を二顆彫り上げたことを今でも誇り思っているという。

一方、初めての本格的な日本の篆刻団体との交流にあたり李剛田氏が衝撃を受けたのは、日本の篆刻作品の斬新な展示方法だ。中国にとって篆刻は実用品、もしくは収蔵品であるのに対して、梅氏の一行はそれを美術館や博物館に相応しい額装の展示品にしたのだ。中国で数百年も続いた伝統——すなわち机の上で印譜を読み、掌の上で印章を観るといった伝統が覆されたのである。李剛田氏が日本の篆刻界の先進的な状況を実感した瞬間となった。

李剛田氏は、前向きに日本の長所を取り入れた。北京中国美術館で展示された「日本の刻字展」を観覧し、新しい刻字の手法や表現方法を高く評価して、二回ほど河南省に招待し、日本の刻字作品を中原の人々に紹介した。

日本に何度も訪問し、さまざまな交流を図った。個展も徳島と東京で開催した。

『宋四家字典』（二玄社）を編集した徳島大学の東南光氏に招待され、二〇一〇年頃、李剛田氏は徳島大学の学生たちに数回にわたり書法講演を行い、市民文化会館では個展も開催して、三週間ほど徳島に滞在し、幅広く書道の交流を果たした。

また、二〇一六年五月十日午前、中国国家芸術基金の支援を受け、西泠印社が中国文化センターと共催し

た「李剛田書法篆刻作品展」並びに「西泠印社社員書法篆刻展」が東京・飯田橋の日中友好会館美術館で開幕となり、李剛田氏は訪日団团长として挨拶し、陳列した近作を解説した。日本書壇の重鎮として、新井光風、河野隆、山下方亭、井谷五雲らの各氏も参列し、揮毫会にも行われた。同日午後、「西泠印社歴代社長書法篆刻展」には、東京・虎ノ門の中国文化センターで同時開催となった。

李剛田氏は篆刻家であり、書家であり、文章家でもある。主な著書は下記の通り。《隸書教程》《篆書教程》《篆刻教程》《篆刻初歩》《歴代印風・黃士陵卷》《古印評改二〇〇例》のほか、作品集として《李剛田篆刻選集》《李剛田對聯書法集》《李剛田書法作品集》《當代篆刻名家精品集・李剛田卷》、さらに随筆集《辺縁断想》、印論集《書印文叢》などがある。

また近年、招待された個展が各地で開催されている。二〇一六年に西泠印社寧波支社展覽ホール、二〇一七年に北京榮寶齋書法館、二〇一八年一月に河南省安陽市博物館、二〇一九年に香港中文大学で開催された。李剛田氏の一層の活躍を期待したい。



郭同慶 かく・とけい 書家、日本名山田慶太郎。一九五七年、上海生まれ。一九八七年に來日。王蘧常、銭君匋、方世聰、蕭海春に師事。二〇一四年度に上海（朵雲軒）、東京、京都、前橋で個展を開催。上海書画出版社で作品集《墨海一粟》を出版。翰墨書道会長、東京藝術院名誉院長、東京海派書画院院長、全日本華人書法家協会副主席兼秘書長、日本王蘧常先生頭彰会会長、豊道春海頭彰会顧問、日中友好協会参事、群馬県日中友好協会理事、上海中国書法院名誉院士、上海呉昌碩藝術研究協会理事、上海復旦大学王蘧常研究会常務理事などを兼ねる。